俚譜薔薇来歌

りふばらいか

島本久恵

筑摩書房

俚譜薔薇来歌

りふばらいか

島本久恵

筑摩書房

俚謡薔薇来歌

©島本久恵
一九八三

一九八三年九月三十日　第一刷発行

著者　島本久恵

発行者　布川角左衛門

整版　井村印刷
印刷　多田印刷
製本　鈴木製本所

発行所　筑摩書房
東京神田小川町二ノ八
振替東京六―四一二三
電話東京二九二―六五二(営業)
二九四―六七二(編集)

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Printed in Japan　0093―80212―4604

第一部

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その一

甲斐路の天のぬけるような青さ、青、ただの青では足らない。かつて知らぬまた想像のしようもかった名玉風の碧空であって、さてそれに彫りぬいたような山影、しかも遠近視線に程よく、あらわれて来、動き、変わって行く、きっと地蔵岳笠取岳そうして際立った個性のためにやや孤立の感の突兀(とつこつ)とした一座。

「二九六六メートルの甲斐駒であります」

進行左方の窓をごらん下さい中部日本の脊梁(せきりょう)をなす赤石山脈が見えてまいりましたご承知南アルプスの山々であります——から始まった専務車掌の案内、リズムに適った音声がいまこう聞こえ、さながらそれは長年の私のゆめに確認を与える。ゆめ実にそれは因縁も何もなくてそれも極めて瞬間的に通り過ぎつつ宿った影で、殆ど一瞥のそのただ一度が昭和十八年八月、燃えるような炎暑の真昼であったものを、どう見た私かその一座を成す山塊ずうっと頭の上に近く、また襞々に幾条(いくすじ)か残んの雪をば刻み込んでいた。そしてそれをほんの通過の間にとらえてそして忘れぬものにしてしまった私、ただ名を誰かにたずねようとし、その都度心の壁からうつし出す気持ちでその姿を感じを聴いてもらって見るのであったが、誰にもそれは通じなかった。「さあ」と首をかしげて「そんな近くに、見たこ

とないなあ」と山にくわしい誰彼もかえって疑問を私に向け、焦慮に近い感じが私に残るだけであった。しかも自分ではあれが甲斐駒と、実はしぜんにきめていたもので、そのため一層思い残しの長い年月、数えるならば三十何年も来ていたのだった。

はからずも今日いま車掌さんのあの案内が確認を得させてくれた。甲斐駒と感じていたのに間違いはなかったのだった。と同時に自分の眼自分の心というものにさながら一穂の妖火を、そしてむろんはじめての発見で感じさせられ、声をうしなうと言っても仰山ではないぐらいの何かに見舞われる。あの八月の暑い旅路で、近々と頭の上に雪をまでも彫り込んで感じたその山が、今日はこれだけ視野にしりぞいていて、しかも疑いもないあの一座なす印象であって、またちょうど条々ときざむ雪の積みぐあい。但し日は立冬から小雪も過ぎて十一月も三十日、見えているあの白条は新雪である。ああ甲斐駒、むかしから変わっていなくて、しかも印象は人と私では違っていたのだ。私は何故あの山を直ぐの頭の上に見上げた。距離感というものがどうした狂いでああだったのか。あの見参、そして今日のこの再会がなかったならば、ついにこの世を辞する時までも山は私の頭の上で、そしてその厳然はその実相の厳然のまま、少しもゆるがぬ感動で終命にともない、永遠があるならその永遠につづいたであろう。

そのような私がそのように人に言って山の名をば問うていたという。そうしていつも疑問をむくわれるばかりであった。いっそ否定で、しかもやっぱり私は私のまぼろしを抱きつづけていて変わらなかった。今日いまその年月の人と自分との違い、何としても通じなかったもどかしさが、落ち着いたそして車体の進行音に少しの違和をもはさむのでない車掌さんのあの声によってするっと解けて、するとそこで私は思い知らねばならない。何よりもいまさらながら立ち塞がるばかりに大きく尊厳をもって浮かび上がるのは、山に詳しくまた達者な旅行者である人びと皆の眼のその科学者、私はほんと

うにいまその科学者に数歩下って、そして自分へは一種の幻覚にさえ至るのである生まれながらの病疾さながらのものへの反省をと思う。

が、どうした、私は、同時に、も一つの自分に即した直観か何か知らぬあれへ、新たな肯定というのか、よりよりの自然なうなずきを、うなずき合いをするところがある。

「左には南アルプス、右には八ヶ岳、この雄大の景観の中を電車はこれより甲斐信濃国境の富士見をさして駆け上がります」

車掌は今度は高らかに言った。

実は私はその彫刻を今日いまはじめて見に行くのではなかった。わざわざと行くそれが二度目で、ただちがうのははじめのその時が、たかぶりをおぼえるほどの熱いそして親身のといった若々しい情から、実はその悲恋に死んだ制作者の心をとむらい慰めようとての思い立ちからであったもので、それがその十八年の八月なかばであったのであり、作品としてつくられた像の本体本人として、この後も伝わることと思われるその一婦人も、老いはしたけれどまだまだ気丈、ようやく逆の目になって行く境遇の中でも生きぬくほどの適応の才では退けをとるものでなく、大世帯の一家のなおも中心であった。そしてかねて親しい私がそういう思い立ちで、故人の遺作の中でも特にその因縁に成る一作を信濃へ見に行く前になると、村の家にもその報らせをし、就いてはまた浅間温泉の目の湯に電話して私のために一、二泊の依頼をするなど、とどかぬ方もなかったのだった。

いうまでもないその人ももう世に亡かった。もともと私とは親子ほどもちがっていたのだった。そうして山岳こそはそのままであっても、行く右ひだり村々を通過する毎に、屋根という屋根おおかたが、東京周辺の新住宅群でも見るよう、色瓦の勝手好みに変わっているなど、地方的品位を自ら失い

つつある。この様子では松本から先き大糸線沿線もとわびしい予感、あの時のあの大糸線沿線のそのまま古駅の象徴と見えた一基の灯籠、豊科駅辺集落の入口であったと思う有明山御灯明の大灯籠が、果たして今もと不安になって来る。

ただ途すがらの様々はどうでも、このようにして行ってまた訪おうとするあの絶作の彫刻には、あの時に感じたような不安むざんの、そしていよいよ崩壊の明日を思わせたあの暗いものは、先ず払われたと信じてよく、というのは、はじめて行ったあの時は彫刻の荻原碌山の名を知る者すら多くはなく、生前親交の間にあった芸術家たちと、特別の理解者の間でだけというように、そうして身を以て示された濃い人間の浪漫作としての、或いは詩歌的興味とおなじとも言われるであろう接しようで、愛しそうして行方を惜しみ、みまもるぐらいのところであったろうか、いまはそれが、中でも私を引きつけてやまないのであるその絶作は重要文化財の指定をうけて国立博物館に移され、その原型の寄贈をば機に全作品を青銅像として穂高町が管理、そしてきわめて個性的な現在の碌山美術館が建設せられ、実はいまもこの行く車内に美術学生と見られる一団が乗り合わせていて、その行く先きは私とおなじと察しておいてよく、心に懐くのは別のものでも、対象は学生たちにはその芸術の研究、私では碌山の人、おなじであった。

そしてまた思わされる、決して決して研究ではない私だけれど、しずかに観れば私もたしかに或る冷徹をば望まされている。涙あふれたあの時ではなく、今日のこの自分は今日の自分の冷静で、二度目の信濃に入るのであった。

あの時私は、教えられた柏矢町の小さい駅で大糸線に別れ、でも並行して行っているのらしい糸魚川街道を行って、里の道標のようにいわれている三枚ばしで流れについて右に入り、これもまた故里

を語られる中でよく聴いている氏神の八幡社、明かるく透いたその森をまわるのであり、すると向こうに集落が見えて来、それがその頃の南安曇郡東穂高村の東はずれ白金耕地の家々であった。彫刻を見せてもらいに行く碌山の生家の農家は、街道のも少し手前を入ってよいので、こう行くのでは遠まわりであり、しかしこの遠まわりは、その彫刻の由来に引かれ、とりわけその跡をとむらう訪れの私であっては、どうでも通って行かねばならない、踏まねばならない順路であって、そろそろ燃えて来る午前の陽がいかにも信濃国原の直射的烈しさなのにも、おのずと示唆の気持ちで受けて、一あしも粗末にはなく行くものであった。

大地が高原のせいか、入って行くと集落はほんの寄合いに見えた。何軒というほどの前を過ぎるともう出はずれで、流れについて来た道なのも、流れを残して急に外れて、左奥に見える、農家とは様子のちがう家の方へ、そして家の前の、庭にもつくらず残されてある空地の一部に入ってしまう。しぜん私はいま来た道をふりかえる気になり、そして頭に歴史の地図のようなものが描かれる。これはこの道は、はじめこの家だけのものであったのだ、この家がここに住みついて街道への出口として開いたもので、道が出来たので集落が次第につくられて行った。そうなのだそしてと、当面彫刻の由来につながる。というのがもうきいて見るなど要らない、余所(よそ)ながらにもと遠まわりして来た、あの作の発祥に因縁の家、そしてその浪漫の発端のここがそのいわば遺跡の家であること。道がこの家で止まりになっている、私はとうとう来たのであった。

けれど私は玄関に行って案内を乞うのを控えた。直接縁故もない者がぶしつけとも思えるのだったし、中に通してもらわなくてもこう来たことで充分の気もし、一つにはよりもっと私を引くのがこの周辺の、地形というがすでに聴かされて心に絵図で入ってるという、その絵図に実際に入って歩いて行ってみること、ならんで来た道から残された流れが急に、落差を起こして下りて行っている方、家

からいえば背後の谷であるのだろう方へ、ひとりで足が向くものでもあった。

下りて行くといって、それは草みちに、足の幅だけ踏みあとがついて行っているのを、踏みこたえながらゆるく傾斜に添うのであって、そして下りきって見るとそこは決して谷ではなかった。広濶としたむしろやさしい光りに満ちた、そしてはじめはやわらかな何かこうスイートな気分といった草原に思えた。

スイートな気分と、これは私がここで感じる特別のものだったろう。何故といって、例の私のよくまぼろしを見る眼なのである。風景の中に歩み入るより早く、もうそこにまぼろしの人影二つを点じて見て居、そしてその人ふたりの配置というのが、一つは水車のまわっている前に、一つは棒の前後に水桶をかついで泉に通う姿であって、水車に向かって手帳を手に写生の風をしているのは筒袖を着て足は藁草履の少年、大きい方ではなく、でも肩揚げはもう取れていた。水桶をかついだのは色が白く、しかしちょっと少年のような顔をしていて、というのが何処か女としては未完成ということになるのであろうか、でも年は二十一二、上の家の若嫁であった。さっさと泉のところへ下りて行く。

まぼろしでなく泉は下にいまも湧いていた。水車はなかった。年月の間に水みちが向かなくなるか水車が壊れたかなのであろう、今はもうあとも残っていないのであった。

でもまぼろしの私の少年はやはりまぼろしの水車に向かい鉛筆を走らす風をして居、やがて水桶をたぶたぶさせて今度は爪先きを踏みしめ踏みしめのぼって帰って行くひとには決して振り向かなくきめている。かえって声はそちらからあった。

——木下さん来てらっしゃるのよ、いらっしゃいね今夜——

女学生ことばだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――ハイ――と言って少年はあわてる。ハイも満足に出たのでないのをどきまぎしながら口惜しく思い返す。

水の音でまぼろしを閉じて泉に近づき、そして気がつく、かがんで汲むのに膝をつかれるよう簀の子が据えてあり、これはこの水がいまも飲料に汲まれているもので、朝の間は露が深いであろう夏くさの中の細みちも現にその通いのためであいていること。これが昔は嫁のあのひとの少年のような素足を濡らし、秋にもなると草の実のはじけで、少年には何でもなかったが、都会育ちでそれも寄宿舎ずくめだった若さ稚なさなのだったろうそのひとなのでは、わざわざ草に入って踏んで、はじける実どもと遊んだか知れない。実に歴然と小みちはそこにあるのであった。そして昔もやっぱりこうであったのだろう、みちは泉に下り立つ手前で、何処からかそこに来ているも少し道らしい道とつながり、そして水音が全く変わる。

でも佇(とま)っていてじっと聴くと変わったのではなかったのだった。落差を離れてゆるりと川に流れ込むと共に水は音をば失ったもので、そして私は別の音をばきき出していたのだったので、しかもそれは極くごくひそっと、むしろ全身に感覚的にの伝わりようで、聴こうそして視ようとしてもきこえるのではまた眼に入るというものではなく、しかも何か近いような遠いような、一種ゆめともいえる誘いをひそかにひそかに持ちつづけていた。

じっと聴きなお聴き澄ますと、水もこれは自身の動きにあるのでなくてまったく無心にしみ出る水で、今まで私について来ていた流れの音が、川床の起伏のせいで微妙に断続をひびかせるのであったのにひきかえ、これは無限でそして広域でと何かこう神秘の感を持たせて来る。

私は道から少し下りてのぞいた。そして目が醒めたように、あの草原と感じていたのが実は一面の

湧水地帯で、おおうて草原のていに見られていた草も土に根ざすただの草ではなかったのだった。一段低く平らに見られたのだったその全体が小石原で、石いしが濡れ濡れしていて、極くごく微妙に、呼吸するようにそうしてちっとも間なしに水をしみ出させている。

清水の湧くのはあすこのあの泉だけではなかったのだった。私は眼を上げ、かつて住んだことのある近江の湖北の生水どころでしたと同じに遙かにつづく山岳群を見遣った。もとよりはじめて気づくのではない、大地はここでは隈々までもが彼方常念や穂高に至るせり上がりなのだ。山岳はそのままが雪水の蔵だ雪水の無尽蔵なのだ。ふくむに余る雪水は河川だけでは処理されはしない。斜度にしたがって麓の地下にはけ場をもとめ、落とされて来てこの地帯ではこのように石をくぐってしみ出るのなのだ。

思わぬ心づきで、何かこう自然との交歓に入り得る気持ちだったのだろうか、人ひとり通っていないただ道だけが延びて行っている向こうへ、私はなおも歩いて行った。榛(はしばみ)の木が自然生えなのだろう寄り合ったり離れたりで直ぐの側に並木をつくって居、その切れ目が来たと思うと土橋で、土橋の下は音もなく藻ぐさが長くなびいていた。

何処までか果てしないので戻りかかると、それで景観がたちまち逆になり、今急に突き出たように一つの森が立っているのが、これはこの地帯では突然のものであるため特に一つと映るのではあったが、またそれがこんもりとよい形をばしているのでの気持ちで、つい今は一幅の水墨画でも懸かったように見て通って来たのだったのだが、土橋の方からの正面に出て来たと見ると、その森なのが今度は景の主体であった。しかも道から小径が入って行っている。私も入って行かねばならない。しぜんにそうなるのだったもので、けれども幾あしでもなく大木の幹をまわることになりうっそうと暗い中に入るのだったが、ほかの樹々との間の隙が透かし窓でもつけたぐあいに、そちら外の水地をのぞか

せて居り、それから足もとを見ると、幹の根元が落葉の島のような高まりの上で、低いところはここもやっぱり水、浅い湛えで、それからそこに冷たく暗くうつるものがあるのが、実に小さく、切りはめたような祠であった。しかも現にていねいな祀りがつづいていると分かる。折敷に洗米のお供え、森と水と巳の日のまつりとそれはもう弁財天と動かぬのであり、私は後しさりに道に出て来、少しの慄えが足もとにあった。そしてその咎めの感じは、森とは道を挟んだ側の、それ故それは台地から下りて来ている傾斜の中段どころにある、まぎれもなく一家の祖先からのと知られる墓所に眼がとどいた時一層に迫られたもので、むろんそれからお墓のならぶところに入って立ったものではなくて、それでいてその幾基か知れぬ古墓の中には背中のまるい舟型碑が、石と共に文字の彫りもかすれてまじっている姿までが想像されて、そうしてその想像に少しの無理もない四囲、すなわち落葉と草と音せぬ水との世界なのである。当然私は古霊の意志に向かうことになる。して来ると思いこめてのはるばるの訪れなのも、深い感での彷徨なのも理由にはならず、自ら余所者の立入りその無作法を認めそうになる。

そうして私は、やさしく好ましく誘惑の気配に満ちた水のほとりを惜しくも去った。

上に戻ると、近所の農家の主婦と見えるひとが流れに下りてお米を洗って、いま洗い上げ、上がるところで、私に気がついて頭を下げ、急いでお家本宅の手前横を木の下伝いに入って行く。呼ばれてお手伝いのところだったらしい、ともう玄関に、

「どうぞ」

と若い当主の声、これは東京から知らせが着いていたのであった。

当主は先代安兵衛からは甥に当たる人で、うけついだ家を守り、先代が遺したものはそのまま大切に、変えずにいる。家の形にしても客座敷の方には折々のしつらえもあることだったが、他は補修にもそのゆきとどきで、とりわけ明治開化のにおいを残す洋風の一室などには、そのむかし東京から来た若嫁の唯一の荷物であった小さな、今では可哀想なばかりの古オルガンも、そのままに窓の下に据えて居、壁には一枚の洋画、これも若嫁が友だちの画家からお別れに贈られて、蒲団包みの中に巻き込んで来たものだという。そしてそこに今らしい色一つ加えることもしていない。そのため、洋室でも畳敷きで一層がらんと広く見えるのがいかにも部屋の由来めいて居、就いては先代安兵衛の大きな男だったというその野人的風貌をしのばせるもので、とりわけこういう訪問の私なのでは、重いドアをあけてここに案内されただけで、もう来た甲斐は充分であった。

この洋室の建て増しは、子供のなかった安兵衛が、父のわすれがたみの末弟愛蔵を準養子として、愛蔵の希望で士族の娘の星良を嫁に迎えてやるのだった、明治三十年の前年、すなわち日清戦後の二十九年、重い腰を上げて東京見物に出かけ、横浜にもまわって戻ると、多分途中からの思いつきであったのだろう、早速に大工を呼んで自分の図引きで建てさせたという。むろん木造、素朴でがっしり出来ているのがやはり明治の風味、しぶく個性的そしてやっぱりハイカラの中のひと味と思えるもので、今では可憐とよりいいようのない天井のシャンデリア仕立て飾りランプが、妙にまた安兵衛の遊びか稚気をば思わすのであり、めずらしい灯りの下に集まった夜々の若者たちの顔の張り満ちた血色までが見えて来る気がする。折角の洋室なのに床を畳にしているのも、最初から使途をそれに当てていたのが分かるのであり、畳なら椅子は要らず、押し合って隅から隅まで坐れるのだった。

果たして洋間は、愛蔵を中心につくられている若者たちの話の場になり、根が教育県の信濃なのである、若者すべてが問題に敏感にそしてその対策に直ちに動く下地をすでにみな持って居り、盛んに

議論をたたかわすと共に直ぐそこからの実行という。後には昔のあの中江藤樹が近江聖人とせられていたのに対照して、これは信濃聖人であろうの言葉を、内村鑑三師もよくその人と事績を認めて送ったなどいう挿話も添うのである人物の井口喜源治後援の運動、そうしてついに研成義塾の設立にまで至ったのなども、この洋室での論議にはじまりそしてここから推進せられた。井口喜源治はもと隣村の小学教師であったのを、自身の清教徒的信念から、生徒の教育に及ぼす感化が気づかわれるというので職を解かれることになった。それに対する若者たちの義憤、そしてそれがこの洋室での討論になり、ここが発火点となって推進された運動、そしてその成果だった。いうまでもなく指導的役割りは愛蔵、そして無言の間で後立てとしての存在は兄でまた義父の安兵衛であったのである。それからその喜源治が愛する弟子の一人であった少年守衛それが後の碌山なのも、この洋室の記録に入るべきものであるのだし、うけついだ当主も一層のこころざしで、そしてこのような訪問の私に親切なのも郷土愛のそれからであった。

ただ先代がのこしたものの一つといっても玄関の大すだれだけは解からなかった。一応旧家の玄関でそれも大ぶりの式台なのにそこへ簾（すだれ）とは、遠慮なく言って私は眼を衝かれ、玄関にかかる第一印象が、意外、戸惑いで、少し混乱したものであった。

簾といっても何とした大きい、咄嗟の連想にも西陽除けに店屋が立てる葦簀（よしず）が浮かんだ、その葦簀を横にしたとでもいう大掛り、そうしてそれに相馬本家の堂々の大文字、むろん今出来ではなく、墨も漆入りかの盛り上がりで、風雪の跡といった薄れかすれもそのまま威風の正に大表示、でもはじめての信濃のことで、里の風習、ところ変われば品変わるなのかも知れず、取り立ててたずねることも失礼に思えた。

けれども当主は敏い察しで、と共に多分にこちらに同感の風で、つねづね去らぬ当惑をたまたまのことに洩らすのでもあったらしく、話はしぜんにこうであった。

「家は代々接骨医でした。何でも先祖からの伝えで、治療に用いる薬なども主人一人が土蔵にこもってつくるのだったそうです。秘伝なのでしたね。それを明治の末頃のこと私には伯父の安兵衛の代なのでしたが、医術も新しくなった、もう古い接骨は要らんといってやめてしまいました。信用もありまた上手でもあったそうでして、やめられては困るつづけていてくれと惜しまれるのをば聴きませんでした、何でもそういう人だったようです。それでまた何か手を出すと好みが違っていましたようで、玄関のあの簾なんかもその一つです。何しろ接骨では聞こえてたもんで、治してもらいに来るのには遠方からも多い、それが重いのは戸板にねかされて来て、途で肩をかわる付き添いも要ります。村に入っても白金の相馬相馬とたずねてやっとたどり着く、ですから大きく書いて出しておく、それだったと思うのですが、まああの表示で、尤も接骨の自信も相当だったからでしょうが」

そして、

「そのまんまを今もああして残す始末でして、私となりますと意味はないし、子供の時分からあんなのとってしまったらと何度父に言ったか知れません、でも父とするとそれは一言に『いかん』なのでして、そして言ったものです、お前は知らんがあれは俺には兄さん安兵衛の恰幅そっくりの気のするもんでな、そうなんだ、兄弟は三人で中の俺だって末の愛蔵だって小さいって方じゃないけれど、兄の安兵衛が大きかったのは第一骨組みが違っていたし、にんてい気質、こう全く胴の据わった、見るから男おとこしていた、六十三で亡くなったんだが、目をつぶると今でもそこに居て見えるんだよ、玄関のあれも片づけてきれいにするはいいが、まあ触わらんとおこう、そう言って除けませんでした。東京の叔父から聴いておいでしょうが、安兵衛はあの愛蔵叔父を準養子のつもりでいたのに、田舎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com